

## 「能力開発」に関する比較研究〔II〕

——「才能教育」の能力観・方法観——

白 幡 久美子  
白 幡 富 夫

### はじめに

本稿は「才能教育」の能力観・方法観を明らかにし、それを通して「鈴木メソッド」の教育的・教授学的意義を考察することを目的としている。「才能教育」を「知能教育」<sup>(1)</sup>と並ぶ有効な「能力開発」の方法だと考えるからである。

「才能教育研究会」の会長鈴木鎮一氏が提唱し、実践している「才能教育」の方法は、「鈴木メソッド (Suzuki Method)」の名で日本のみならず、世界各国に広く知られている。否、「鈴木メソッド」の名は日本においてよりむしろアメリカを中心とする欧米諸国において知れわたっていると言っても過言ではない。アメリカに例をとれば、1985年の時点ですべての州に支部があり、会員数20万人と言うことである<sup>(2)</sup>。ちなみに日本の会員数は3万人ということである。さらに、鈴木鎮一氏がボストンにあるニューイングランド音楽学校 (1966年)、ルイ・ビル大学 (1967年)、ロチェスター大学 (1972年) 等から名誉博士号を授与されていること、ジョージア州アトランタ市より名誉市民の称号を受けたこと (1978年)、1982年イリノイ州が10月3日を「スズキデー」と制定したこと等々<sup>(3)</sup>をみれば、鈴木鎮一氏及び「鈴木メソッド」の名がアメリカにおいていかに知れわたっているかが分かるであろう。

鈴木鎮一著『愛に生きる』講談社現代新書、

1966年や『才能開発は0歳から』主婦の友社、1969年が“Nurtured by Love”<sup>(4)</sup>及び“Ability Development from Age Zero”<sup>(5)</sup>として翻訳されている。その他、「鈴木メソッド」に関する研究書や実践書がいくつも出版されている。<sup>(6)</sup>アメリカにおいて「鈴木メソッド」がいかに重要視されているかを示す例は他にもたくさんあり、全部を挙げることは不可能である。このようなアメリカでの評価に比べれば、日本での鈴木鎮一氏及び「鈴木メソッド」に対する評価はまだまだ低いと言わざるを得ない。

「鈴木メソッド」の有効性は、音楽の世界、就中、バイオリンの世界では実証され、世界的に高く評価されている。鈴木鎮一氏はかつて江藤俊哉、有松洋子、小林武史、小林健次、豊田耕児、鈴木秀太郎、諏訪根自子等々<sup>(7)</sup>世界的に活躍しているバイオリニストを多く育て、今なお世界中で30万人の会員を育てている。指導法も徐々に向上してきており、今では6歳でバッハの協奏曲イ短調、モーツァルトの協奏曲第4番はもちろんのこと、メンデルスゾーンのバイオリン協奏曲ホ短調をひきこなす子どもでている<sup>(8)</sup>。

「鈴木メソッド」は、しかしながら、バイオリン、チェロ、ピアノ、フルートという音楽の世界ばかりではなく、本稿で十分考察するゆとりはないが、音楽以外の教育のいかなる分野でも効果的な方法だと思われる。実際、松本の才能教育幼児学園での実践<sup>(9)</sup>、本郷小学校での実

実践<sup>10)</sup>、豊橋の仔羊幼稚園での実践<sup>11)</sup>、障害児を対象としたキラキラ星園での実践<sup>12)</sup>、幼児開発協会の実践<sup>13)</sup>の成功が詳しく報告されている。教育学者、教授学者が「鈴木メソッド」に対して沈黙を保っている現在<sup>14)</sup>「鈴木メソッド」を教育学的・教授学的に考察する必要性を強く感じるのである。

## 註

- (1) 白幡久美子、「能力開発」に関する比較研究(I)——「知能教育」の目的・内容・方法——，東海女子短期大学紀要第12号，1986年，115—127ページ参照。
- (2) 鈴木鎮一監修『どの子も育て方ひとつ』原書房，1985年，204ページ。  
アメリカにおける「鈴木メソッド」の普及の経過並びに状況については次の文献が詳しい。  
・望月謙児，アメリカを揺り動かしたスズキ・メソッド，（『鈴木鎮一全集7』双柿舎，1985年，339ページ）  
・本田正明，“スズキの衝撃”とアメリカの才能教育，（同上書，350ページ）  
・小島正美『世界に幼児革命を』共同音楽出版社，1985年。
- (3) 『鈴木鎮一全集，別巻2 写真集鈴木鎮一と才能教育』双柿舎，1985年に詳しい鈴木鎮一氏の年譜が掲載されている。これを見れば，彼の輝かしい業績を他にもたくさん知ることができる。
- (4) Shinichi Suzuki, Nurtured by Love, Translated by Waltraud Suzuki, New York, 1983.
- (5) Shinichi Suzuki, Ability Development From Age Zero, Translated by Mary Louise Nagata, Ohio, 1981.
- (6) 例を挙げよう。  
・Evelyn Hermann, Shinichi Suzuki: The Man and His Philosophy, Ohio, 1981.  
・Kay Collier Slone, They're Rarely Too Young, And Never Too Old "TO TWINKLE", Kentucky, 1982.
- (7) 鈴木鎮一『愛に生きる』講談社現代新書，1966年，49—50ページ。なお，小林武史『ヴァイオリン一挺，世界独り歩き』芸術現代社，1980年には当時の鈴木氏の指導の様子が述べられている。
- (8) 才能教育研究会においては，バッハは高等科，モーツァルトは研究科，メンデルスゾーンは研究科第

4期の卒業曲である。6—7歳で高等科・研究科を卒業する生徒が毎年何人もでてくる。（『鈴木鎮一全集7』前掲書，334ページ及び才能教育研究会『才能教育』No.77，1986年夏季号，83ページ参照）

- (9) 『鈴木鎮一全集3』双柿舎，1985，95—193ページ。
- (10) 田中茂樹『落伍させない教育法』サイマル出版，1975年。及び，田中茂樹『幼児育て方ひとつ』サイマル出版，1978年。
- (11) 上里吉堯『幼稚園はおまえたのためにこそ』才能教育研究会，1981年。
- (12) 本多正明『キラキラ星のこどもたち』中央法規出版，1981年。及び本多正明『脳障害児も治る』サイマル出版，1985年。
- (13) 井深大『幼稚園では遅すぎる』ごま書房，1971年。及び井深大『あと半分の教育』ごま書房，1985年。
- (14) 心理学及び教育学関係の文献で「才能教育」について比較的大きくスペースをさいているものに次のものがある。  
・黒田実郎『才能教育』創元社，1972年。  
・多湖輝『愛の才能開発』桐原書店，1982年。  
・幼児開発協会編『幼児教育を築いた人びと』春秋社，1985年。  
・竹内通夫『現代幼児教育論史』風媒社，1981年。

## I. 素質と能力の関係

鈴木氏のいう「能力」とは極めて広い概念である。彼によれば，「人の心も，性格も，言葉も，運動や行動も，文学，音楽も，絵画等の芸術能力も，怒ることも笑うことも，技術もセンスも，みな能力」<sup>1)</sup>なのである。そして，彼は「人間のすべての能力は才能である」<sup>2)</sup>と言う。

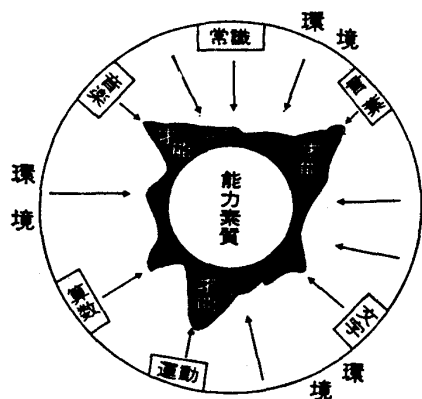
これらの能力のうち，ほとんどの子どもが十分に育てられている能力は母国語を話す能力である。「日本じゅうの子どもが，みんなりっぱに日本語を話す。大阪の子どもはあのむずかしい大阪弁を，東北の子どもたちは，われわれがとてまねのできない東北弁を」<sup>3)</sup>

母国語を話す能力はもちろん生まれつきではない。同様に，音楽的能力はもちろんのこと他のいかなる能力も生まれつきではない。人間が生まれつきもってくるものは，鈴木氏の言葉で言えば，「能力素質」だけである。「能力素質とは，刺激とその繰り返し，すなわち訓練によ

って育つ特性をもった『才能の種子』ともい  
べきものである。』<sup>(4)</sup>しかも、「能力素質」は豊  
かな陶冶可能性を有している。鈴木氏の陶冶可  
能性に対する考えは、ジョン・ロックのタブラ  
ラサ論に通じるものがある。教育・環境万能論  
なのである。したがって、鈴木氏によれば、「能  
力の芽」は「それが善であろうと悪であろうと、  
上手も下手も美も醜も少しも区別なく、訓練の  
ままに育つ」<sup>(5)</sup>のである。

しかし、もちろん環境にないものは育たない  
し、訓練しなければ育たないのである。鈴木氏  
は次のように言っている。「能力というものに  
芽をださせるにしても、種子と同様にそこに刺  
激というものを与えなければ芽を吹かぬもので  
ある。」<sup>(6)</sup>「刺激も与えず訓練も行なわないなら  
ば少しの発育もしないで、素質のまま無能状態  
で終わるもの」<sup>(7)</sup>である。もちろん、無意図的  
環境であっても、その中で生活する限り刺激  
を受ける。ペスタロッチが言うように「生活は  
陶冶する」のである。しかし、その環境を意図  
的に整備していかない限り、「能力素質」がど  
の方向にどれだけ伸びていくか、当てにすること  
はできない。伸ばしたい方向に十分伸ばすた  
めには、意図的に環境を整備し、正しい刺激を  
与えなければならない。

人間の諸能力は、生来の「能力素質」と環境  
との輻湊によって顕在化してくるのである。鈴  
木氏は「能力素質」と環境との関係を次のよう  
な図で説明している。<sup>(8)</sup>



それでは、生来の個人差はないのだろうか？  
鈴木氏によれば個人差はあると言う。ただし、

それは「順応の感度と速度の優劣」<sup>(9)</sup>だけであ  
る。しかし、鈴木氏は「言葉が自由に話せる程  
度であるならば、相当すぐれた能力発揮が行な  
われるはずである。」<sup>(10)</sup>と考える。それは鈴木氏  
及び才能教育研究会の指導者たちによってみご  
とに実証されている。才能教育研究会ではなん  
のテストも行うことなく、希望者全員を引き受  
けてバイオリン、ピアノ、チェロ、フルートの  
レッスンを行っている。鈴木氏の指導の成果の  
一部は既に〈はじめに〉で述べた通りであるが、  
ここでは1986年3月に才能教育研究会の高等科  
研究科を卒業した生徒の人数と年齢を示すこと  
にしよう。<sup>(11)</sup>

1985年度の高等科・研究科（第1期）の卒業  
生はバイオリン科824名、ピアノ科613名、チェ  
ロ科39名、フルート科11名の総数1487名であ  
った。そのうちアンケートに答えてくれた306名  
の卒業年齢は6歳から17歳までにわたっている  
が、9歳から14歳までの生徒が多く、全体の79  
パーセントに達している。このように若くして  
卒業していく彼等は、特に選ばれた子どもたち  
ではないのである。驚くべきことである。

以上、鈴木氏の素質・能力観を考察してきた。  
彼の素質・能力観は近代教授学の歴史をひもと  
くと、必ずしもまったく新しいというわけでは  
ない。例えば、F. A. W. ディースターヴェーク  
の素質・能力観ときわめて類似しているのであ  
る。<sup>(12)</sup> ディースターヴェークは、人間の素質を、  
「能力あるいは活動の可能性への（現実的な）  
基礎」もしくは「生ある芽」と捉える。したが  
って、それは、「他からの援助」、つまり「刺激」  
がなければ発達することができないのである。<sup>(13)</sup>  
しかも、「素質に対する刺激が適切でなければ、  
その刺激は素質に何の影響も与えないか、ある  
いは発達が不自然な、異常な方向をとる。つま  
り、教育でかえってだめになってしまうこと  
になる」<sup>(14)</sup>と言う。したがって、鈴木氏におい  
てもディースターヴェークにおいても、いかな  
る刺激を与えるかが教授学上あるいは教育学上  
の重要問題になってくる。ディースターヴェーク  
の言葉で言えば、「教育の技術は刺激の技術そ  
のものである」<sup>(15)</sup>ということになる。鈴木氏の

能力観は近代教授学の歴史に照らしてみると、きわめて的をえたものであることがわかる。

#### 註

- (1) 『鈴木鎮一全集2』双柿舎, 1985年, 14ページ。
- (2) 同上書, 13ページ。
- (3) 鈴木鎮一『愛に生きる』講談社現代新書, 1966年, 10ページ。
- (4) 『鈴木鎮一全集1』双柿舎, 1985年, 184ページ。
- (5) 『鈴木鎮一全集2』前掲書, 35ページ。
- (6) 『鈴木鎮一全集1』前掲書, 95—96ページ。
- (7) 同上書, 185ページ。
- (8) 同上書, 186ページ。
- (9) 『鈴木鎮一全集2』前掲書, 16ページ。
- (10) 『鈴木鎮一全集1』前掲書, 185ページ。
- (11) 『才能教育』No.77, 1986年夏季号, 82—83ページ。
- (12) 白幡富夫, F. A. W. ディースターヴェークの幼児教育思想, 東海女子大学紀要, 創刊号, 1981年参照。
- (13) A. Diesterweg, Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer, besorgt von J. Scheveling, 1958, S.68.
- (14) Ebenda, S. 69.
- (15) F. A. W. Diesterweg Sämtliche Werke, II, Band, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin, 1957, S. 297.

## II. 能力を育てる五つの条件

才能豊かであるといわれる人たちの能力は、生まれつき備わっていたものでは決してなく、後天的に育てられたものである。逆に、才能に乏しいと嘆いている人たちの能力は、生まれつき乏しかったのではなく、育てられてこなかったにすぎないのである。鈴木氏は次のように述べている。

「今までの子どもたちのほとんどが、その優れた能力を発揮する機会も与えられず大人になって行くのは、端的に言えば、その子どもたちの親たちが、子どもの能力を引き出して早くからこれを立派に育てる努力を払わないがため、せっかくの能力の芽が枯衰してしまい、優れた能力を発揮するはずの能力の苗が痩せ細った苗となり、取り返しがつかぬことになってゆくか

らである。」<sup>(1)</sup>

それでは能力が育つためにはいかなる条件が必要なのであろうか。鈴木氏は、「能力の育つ条件」として早くから次の五つを強調していた。<sup>(2)</sup>

- よりよき環境
- より早い時期
- よりすぐれた指導者の力
- より多き訓練
- より正しき指導の方法

現在では、「才能教育5訓」として次のような洗練された表現に改められている。

- より早い時期
- よりよき環境
- よりよき指導法
- より多き訓練
- より高き指導者

順番と表現が若干異なるだけで言わんとしていることは一貫している。教育学的・教授学的にみても極めて重要な原則だと思われるので、以下順番に詳しく考察することにしよう。

#### ① より早い時期

子どもが3—4歳にして母国語を話すすばらしい能力を獲得し、それを発揮することができるのは、誕生と同時に数限りない母国語の刺激を受け続けてきたからである。中学生になってから、あるいは大人になってから第2、第3外国語を習得することの困難さ、また、たとえ習得できたとしても母国語の堪能さと比較したときの未熟さを考えると言語教育（特に、話す教育Speaking）における早期教育の重要性は疑いえない。狼に育てられたカマラとアマラが、人間界に復帰してからもなかなか言語を獲得することができなかった<sup>(3)</sup>のは、言語教育にとって重要な乳幼児期の言語刺激に欠けていたからである。

鈴木氏はドイツに8年間留学し、ドイツ人ワルトラウト・プランゲさんと結婚し、ドイツ語に堪能でありながら、rの発音はドイツ人の子どもにかなわないと言う<sup>(4)</sup>。

早期教育が重要だという点では、音楽も言語と同じである。音楽的才能は遺伝か環境かが論

争されてきたが、<sup>5)</sup>一流の音楽家はほとんど例外なく、小さい時から良い音楽的刺激を受けて成長してきているのである。バッハのような一流の音楽家は、確かに「能力素質」の「順応の感度と速度」に優れたものをもって生まれてきたであろう。しかし、彼を取り巻く家庭環境が極めて音楽的であり、乳児期から優れた音楽的刺激を受け続けてきたために彼の音楽的才能が開発されたのである。

鈴木氏は、「赤ちゃんに、ひどい音痴の歌をテープに録音して、毎日それを聴かせて育てれば、どの子でもみんな音痴になる<sup>6)</sup>と述べている。逆に、優れた演奏家の音楽を聴かせ続けられれば、優れた音楽能力を開発することができるのである。誕生後間もなくから、ヴィヴァルディのイ短調協奏曲を聴かせて育てれば、生後五か月でそのメロディーを覚えてしまうように、「環境に適應して、幼児は無意識のうちに、見聞きするすべてを身につけて育ち、その人格を形成していく<sup>7)</sup>のである。

言語や音楽ほど顕著ではないにしても、将棋や囲碁の能力も水泳や体操等の運動能力も、より早き時期からの訓練が効果的であることを疑うことはできない。それらの領域で優れた成績を残している人たちはほとんど、小さい時から訓練を受けているからである。

生理学的にみても、脳の発達が著しいのは生後10歳前後までなのである。この時期までに、十分な刺激を受けずに過ごしてしまうと、その後の能力開発は相当の困難を抱えてしまうのである。

## ② より良い環境

人は環境の子である。したがって、環境にならないものは育たない。「アインシュタインも、ゲーテやベートーヴェンも、もし石器時代に生まれていたならば、やはり、石器時代のひとびとの文化能力のひとにしか育たなかった<sup>8)</sup>はずである。逆に、石器時代の乳児を現代の環境で育てれば、現代の文化能力の人に育て上げることは容易である。

日本人の子どもが日本語を話すのは、日本人

として生まれたからではない。同様に、英国人が英語を話すのは、英国人として生まれたからではない。日本人として生まれても、日本語ではなく、周囲の人たちが英語を話す環境で育てられれば、英国人と同じように英語を話すことができる。また、英国人として生まれても、英語をまったく使用しない環境で育てられれば、英語を話すことはできないのである。まったく当然のことである。

子どもは親の鏡であるといわれる。親は子どもにとって最初にして最大の人的環境である。鈴木氏は次のように述べている。「夫婦の和はそのことがすでに幼い子供に美しい立派な環境を与えることになるわけで、美しい家庭をつくることは心の美しい子供をつくることになりま<sup>9)</sup>す。」子どもの悪業に対して「親の顔が見たい」などというのは、子どもに与える親という人的環境の大きさを表現したものである。

## ③ より良い指導法

苗に水分や養分が必要だからといって、やたらに多量にあげればよいわけではない。庭木のせん定が必要だからといってむやみやたらと切ったのでは庭木を枯らしてしまうであろう。教育も同じである。それぞれの子どもの発達段階にあった、目的に合った指導法がとられなければその子の能力を開発することはできない。逆に指導することによってバイオリンならバイオリンを嫌いにしてしまうことだってあるわけである。

いかなる指導法が良いのかということに関しては次章以下で詳論する。ここでは一般論として、子どもに意欲をもたせる指導法、喜んで集中する指導法、落伍させない指導法、知識ではなく能力を引き出す指導法がより良い指導法だと述べるにとどめる。

## ④ より多き訓練

右ききの人右手は左手に比べてはるかに器用に動くのは、なぜだろうか？それは、右手を左手よりもはるかに多く訓練してきたからにすぎない。鈴木氏は繰り返すことの重要性を次の

ように指摘している。

「右手の非凡な能力はどうしてできたか。くり返してやったからだ。人間として非凡になることも、その方法は同じことだ。できたとして、それでやめては身につかない。できたことをもう一度やってまたでき、またやってもっとでき、さらにやってもっとりっぱにでき・・・というように、できたことをくり返す。」<sup>(8)</sup>

これは行動科学の面から考えれば自明の理であろう。

### ⑤ より高き指導者

「指導者の力と指導方法に対する研究の深さが、子供の能力発揮の限度<sup>(9)</sup>となる。つまり、指導内容や指導技能に対する専門的な実力は、もちろん「より高き指導者」の条件であるが、それだけでは不十分である。「実力のある偉い先生でも、才能教育の方法、すなわち子供の能力の育成についてまったく理解のない先生であるならば失敗を招く<sup>(10)</sup>ことになる。その他にも、指導者としての温かい人間性が重要であることは言うまでもない。鈴木氏は次のように述べている。

「すぐれた先生は、生徒の演奏能力がどのように育っていくものであるかを知り、矯正はどのように骨の折れるものであるかを知り、また人の心はどのように育っていくものであるかを知って、生徒にいつも大きな喜びと希望をもたせながら、温かく守り育てていく人である。」<sup>(11)</sup>

### 註

- (1) 『鈴木鎮一全集1』双柿舎、1985年、75ページ。
- (2) 同上書、189ページ。
- (3) J. A. L. シング『狼に育てられた子—カマラとアラの養育日記』福村出版、1977年参照。
- (4) 鈴木鎮一『才能開発は0歳から』〔増補版〕主婦の友社、1969年、33ページ。
- (5) 山松質文『音楽的才能』大日本図書、1974年、17—34ページ参照。
- (6) 鈴木鎮一『愛に生きる』講談社現代新書、1966年、25ページ。
- (7) 同上書、20ページ。

(8) 同上書、32ページ。

(9) 『鈴木鎮一全集1』前掲書、193ページ。

(10) 鈴木鎮一『愛に生きる』前掲書、89ページ。

(11) 『鈴木鎮一全集1』前掲書、219ページ。

(12) 同上書。

(13) 『鈴木鎮一全集2』双柿舎、298ページ。

## III. 母国語教育法から「鈴木メソッド」へ

「鈴木メソッド」とは、どの子ども育つ教育法の代名詞である。どの子ども育つ教育法のモデルは母国語教育法である。なぜなら、世界中の子どもが皆みごとにそれぞれの母国語を話す能力を獲得しているからである。「鈴木メソッド」のそもそもの出発点は、鈴木氏が、能力を開発する母国語教育法の長所に気づいたことであった。「日本中の子供たちが、日本語を自由自在に話す能力に育っている<sup>(12)</sup>という当然の事実」に驚き、どの子ども育つ教育法を発見したのである。

鈴木氏は母国語教育法に見られる「どの子ども育つ道」を次の10点にまとめている。「鈴木メソッド」の神髄が含まれているので、少し長くなるが、引用してみよう。

1. 母国語の教育は、生まれた日から始まっている。
2. すぐれた環境の中で毎日育ち、すぐれた日本語の先生が常にそのかたわらにいる。
3. 母国語の教育では、子供たちは一日も休まず、朝から晩まで熟練への訓練が行われている。
4. 母国語は、なんの苦労もなしに育っていく。
5. 母国語はいやになって途中でやめる者がひとりもない。
6. 母国語では、親たち(先生)が教えることに苦労しない。
7. 母国語では、好ききらいなしに、どの子どもよく育っていく。
8. 母国語の教育では、劣等感を育てない。
9. 母国語教育では、教材を与え、教えわからせ、その教材で熟練を行なわせ、能力を育てていく。能力を育てる教育、すなわち教育の教と育とが完全に行なわれている。
10. 母国語教育では、教えた言葉に次の言葉を

加えて熟練し、しだいにその言葉を増やして熟練させながら、より大きな能力への開発が行なわれている。すなわち、能力が能力を育て、どの子供もそこに力強い大きな能力が育ち伸びていく当然な方法が行なわれている。これこそ、どの子供も育つ教育法、人間の能力の可能性が開発されていく当然な育て方である。<sup>(2)</sup>

1からは、「より早い時期から」という「鈴木メソッド」の指導訓が導き出される。母国語教育は「より早い時期から」という点では最も徹底している。無意図的ではあるが、生まれた日から行なわれているのである。

2からは、「より良き環境」・「より高き指導者」という指導訓が導き出される。四六時中いつでも、愛情に溢れた母親や家族の母国語を聴ける環境は、母国語教育にとっては理想的な環境である。また、赤ちゃんの身の周りの世話をしながら、笑顔で、繰り返し繰り返し同じ言葉かけのできる親は、赤ちゃんの母国語教育においては最高の指導者である。

3からは、「より多き訓練」という指導訓が導き出される。多く訓練すればするほど、能力はより良く開発される。赤ちゃんは、目覚めている間はほとんど無意識的に母国語教育を受けているのである。

4—10とりわけ9と10からは、「より良き指導法」という指導訓が導き出される。母国語教育が最良の方法であるがゆえに、「なんの苦勞も」「好ききらい」もなしに、どの子も育っていくのである。また、母国語教育法が最良の方法であるがゆえに、「劣等感」を育てず、したがって「途中でやめる者がひとりもない」のである。

それでは、「親たち（先生）が、教えることに苦勞しない」母国語教育法の本質はどこにあるのだろうか。9—10に述べられている通りである。そして、これこそが「鈴木メソッド」の重要な指導原則となっているものである。

「教材を与え、教えわからせ」るだけでは、知識とはなっても能力にはならない。しかも、その知識は時間の経過とともに忘れられてしまう運命にある。鈴木氏は「先を急ぐ者実力足

らず」<sup>(3)</sup>と述べ、できることを繰り返してより立派にできるようにすることによって能力を育てることの重要性を強調する。F. A. W. ディースターヴェークも「確実な進歩を可能にする」ために「基本」あるいは「要素的なもの」に十分時間をかけ、知識が能力として顕在化するまで熟練させることの重要性を強調する。<sup>(4)</sup>

鈴木氏が最も恐れるのは、「教材を進めて、子供、落伍させ」<sup>(5)</sup>ということである。知識を能力にまで高めるためには、最初はできるだけ「教」を少なくし、「育」を多くしなければならない。鈴木氏の「教育育育・・・」<sup>(6)</sup>という考えは、ディースターヴェークの「できるだけ少なく教えよ！」<sup>(7)</sup>という教授規則と奇妙に一致するのである。

そんな方法では時間がかかり過ぎるのではないかという反論ないし懸念が予想される。しかし、いったん能力が育てられれば、能力が能力を生み、教材を習得する速度も増すのである。鈴木氏は、「才能教育法によって育てられてゆく子供と、そうでない方法によって育てられてゆく子供の能力の増強差は、最初の半年では少しの差、1年の後には大きな開きとなり、3年、5年の後には、10倍なり100倍なりの能力の開きができるようになる」<sup>(8)</sup>と述べている。これは少なくとも、バイオリンにおいては十分実証されている。なぜそうなるのだろうか。それは「鈴木メソッド」の「よき活用能力を育てる訓練」によって、「必ず能力の飛躍が始まる」<sup>(9)</sup>からである。

「能力の飛躍」を産む具体的な指導は次のような順序で進められる。<sup>(10)</sup>

1. きわめて少量のできることから始める。
2. それを自由自在になるまで訓練する。
3. 自由になったものを立派に矯正する。
4. 力が育ってくるのを注意する。
5. 同じ程度のものを少量新しくくわえる。
6. でき上がる速度が違ってきている。（能力が芽生え始める）
7. 前のものと新しいものとの二つを訓練させる。
8. 前のものをますますよくする。新しいもの

を立派に矯正する。訓練をやめない。

9. 前のものがますます立派になる。(能力が育つ)新しいものが、立派に、自由になる。
10. 同じ程度の第3のものを与える。
11. 能力が増しているから、でき上がる速度が  
いっそう短縮される。
12. 以上三つのものを訓練する。
13. 第2のものが第1のものと同じくらい立派  
になる。(能力が育つ)
14. 第3のものをよく矯正する。
15. 第1, 第2が, ますます立派になる。訓練  
はいつもより立派にと要求する。(能力が育つ)
16. 第4のものを与える。(少し程度をあげる)
17. 第4を処理する能力に注意する。能力がで  
きていけばやさしいと思って平気でやれる。
18. 第1, 第2, 第3と第4とを訓練する。第  
4を立派に矯正指導する。第3を第1, 第2  
と同じ立派さにする。(能力が育つ)
19. 第4が立派になってくるのを待つ。立派に  
自由になったら第5のものをやらせる。

・・・以下略

このような指導を行えば、子どもは何の苦もなく、「要素的なもの」に十分時間をかけながら、「容易なものから困難なものへ」・「単純なものから複雑なものへ」・「既知のものから未知のものへ」と進みながら、<sup>(1)</sup>いつのまにか飛躍的な能力を身につけることができるのである。近代教授学の歴史の中で確立されてきた原則が、鈴木氏によって実践的に主張され、いまや大きな成果をあげている。まさに「鈴木メソッド」とは、近代教授学の歴史のなかで確立されてきた教授原則をみごとに活かした指導法なのである。鈴木氏自身、ペスタロッチの「同心円の発達原理」と上述の才能教育法との類似に気づき、100年の遅れを嘆いている。<sup>(2)</sup> 100年の遅れを取り戻すためにも、今後「鈴木メソッド」の研究が音楽以外の分野でも進められ、教育界に定着させていく必要がある。

#### 註

(1) 『鈴木鎮一全集3』双柿舎, 1985年, 19ページ。

(2) 同上書, 16-19ページ。

(3) 『鈴木鎮一全集1』双柿舎, 1985年, 26ページ。

(4) A. Diesterweg, Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer, besorgt von J. Scheveling, Verlag Ferdinand Schöningh, Paderborn, 1958, S.130f. und S.115f.

(5) 『鈴木鎮一全集3』前掲書, 18ページ。

(6) 鈴木鎮一『幼児の才能開発』明治図書, 1969年, 88ページ。

(7) A. Diesterweg, Wegweiser . . . . , a. a. O., S.98.

(8) 『鈴木鎮一全集1』前掲書, 129ページ。

(9) 『鈴木鎮一全集3』前掲書, 112ページ。

(10) A. Diesterweg, Wegweiser . . . . , a. a. O., S.106f.

(11) 『鈴木鎮一全集3』前掲書, 253ページ。

## IV. バイオリン指導法の特徴

「才能教育」の実践的指導法の特徴を、バイオリンの指導法に例をとって考察していく。ただし、音楽の専門的考察ではなく、教育学・教授学的考察に限定する。

### 1. 意欲づくり

馬を水辺に連れていくことはできても、むりやり水を飲ませることはできない。走らせるなどして、喉の渇きを覚えさせれば、馬は自分から進んで水を飲むであろう。幼児に対するバイオリン指導の場合も同様である。鈴木氏は、意欲をつくるには「きかせる、見せる、という二つの条件」が重要だと述べている。<sup>(1)</sup> 他の子がバイオリンを楽しそうに弾いているところを見せたり、母親が楽しくキラキラ星を弾くことによって、子どもに自分も弾いてみたい、自分もバイオリンを持って遊びたいという気持ちを起こさせるのである。

一度バイオリンに対する興味を喚起したら、その興味を持続させなければならない。そのためには子どものできることを繰り返させ、どんどん褒めることである。「子どもとはもともと繰り返しが好き」<sup>(2)</sup> なものだし、褒められれば意欲がわいてくるのは当然だからである。意欲づくりにおいては「希望をもたせるほめ方」<sup>(3)</sup> が決定的に重要なのである。「なかなかいいねえ、わるいところを除けばね (Very good, except bad point)」<sup>(4)</sup> これは鈴木氏独特のユーモアで



あるが、まず褒めてそれからより立派になるように矯正していくという「鈴木メソード」の重要な指導言なのである。教授学における「自発性の原理」の尊重であるといってもよい。

## 2. 「マクベス奏法」

鈴木バイオリン指導曲集第2巻の1番目の曲は、ヘンデルの「合唱『ユダスマカベウス』から」である。2巻以上の子どもには、レッスンの初めに必ずこの曲の最初の8小節を演奏させる。鈴木氏はこれを「マクベス奏法」と名付けている。<sup>(5)</sup>

「マクベス奏法」のねらいは、「基本」を繰り返すことによって、①レッスン前の心身の緊張をとき、②「弦を鳴らす」能力、つまり立派な姿勢で立派な音をだす能力を身につけさせることにある。<sup>(6)</sup> ずっと先まで進んでいる上級生に対しても、常に「マクベスと同じようにして弦を鳴らしているかどうかを检查しながら」<sup>(7)</sup>、換言すれば、「基本」をおろそかにしていないかどうか、能力が育っているかどうかを確認しながら指導が進められるのである。

## 3. 「パンダ奏法—親指の力づくり—」

子どもに人気のある動物パンダの名前をつけた、ユニークな奏法の指導である。それがいかなるものか、鈴木氏の言葉を引用しよう。

「生徒の弓を少し強めに張って次のように弓を持たせて下さい。親指の爪の右の角で持たせ親指と人さし指と小指だけで弓を持つ。そしてバイオリンのD弦の上に弓をのせ（先ず弓の中央で）右腕をよくみて下げさせ親指の爪に力を加えて、音は出すのではなく、その弓の馬毛と棒とが『パンダ』といって親指の力でぴたりと弦につくように押さえる。」<sup>(8)</sup>

バイオリンの専門家もしくは経験者でないと上述の説明はわかりにくいかもしれない。要するに、子どもに響きのある大きな音を出させるための、弓の持ち方に対する指導技法なのである。これを数多く訓練させ、この弓の持ち方を常に自覚させるためには、子どもたちが一度聞いたら絶対に忘れない、親しみやすい名称が必要なのである。「鈴木メソード」においては、このように子どもの心理を巧みに利用して、高

度な技能を身につけさせるのである。

## 4. 1万回のおけいこ

「パンダ奏法」にしても、だいたい1万回繰り返せば身につくという。一見膨大な1万回という数字であるが、毎日100回やれば100日ででき、毎日50回やれば200日でできることになる。「活用能力」を育て、「能力の飛躍」をうみだすためには、繰り返すことがどうしても必要である。「やり抜く——つまり、その根気もまた、能力であるがゆえに、育てなければならない」<sup>(9)</sup>ものである。繰り返すことの重要性を強調するのは、教授学における「定着の原理」であるといえる。問題は飽きさせずにいかに繰り返させるかである。

## 5. 「宝くじコンサート」

これは各教室でのレッスンの時に、すでに弾けるようになっている曲の名前が書いてあるくじを引いて当たった曲をミニコンサートで演奏することをいう。くじの中には“大当たり”のくじも含まれており、これが当たれば、何でも好きな曲を弾いてもよいのである。宝くじには一獲千金の夢が託されている。「宝くじコンサート」の場合は、ささやかな夢ではあるが、子どもの心を巧みにつかんだ方法である。子どもたちにとって、宝くじをひいて当たった曲を演奏することは大きな喜びとなる。それを正面きって今まで習った曲のテストをするといってしまうと、子どもにとって楽しいものではなくなってしまう。「宝くじコンサート」という夢のあるものだからこそ、子どもたちはどの曲があたってもよいように、すでに習った曲を繰り返し繰り返しテープにあわせて練習するのである。「宝くじ学習で、すんだ曲も毎日テープに合わせてやるように注文をつけておけば、能力が育って」<sup>(10)</sup>くるのである。

その他、「逆さ弓奏法」<sup>(11)</sup>、「クライスラー・ハイウェイ」<sup>(12)</sup>、「重点的矯正法」<sup>(13)</sup>等々、鈴木氏が考案した奏法・指導法はたくさんある。いずれも、理屈ではなく身体で覚えさせるための工夫である。対象が幼児の場合、理屈で説明されても理解することはできないし、それでは興味をもって続けることはできない。「鈴木メ

ソード」は、教授学における「興味の原理」に深く根ざしているのである。「興味というものは、できるという自信の中から湧き出すもの」である。<sup>(4)</sup>

#### 註

- (1) 『鈴木鎮一全集5』双柿舎, 1985年, 147ページ。
- (2) 鈴木鎮一監修『どの子も育つ育て方ひとつ』原書房, 1985年, 42ページ。
- (3) 同上書, 144ページ。
- (4) 同上書。
- (5) 『鈴木鎮一全集4』双柿舎, 1985年, 159ページ。
- (6) 同上書。
- (7) 同上書。
- (8) 才能教育研究会『才能教育』No.71, 1985年冬季号, 52ページ。
- (9) 鈴木鎮一『愛に生きる』講談社現代新書, 92ページ。
- (10) 『鈴木鎮一全集3』双柿舎, 287ページ。
- (11) 弓を逆さにして, 弓先に小指をつけて持って弾く奏法。逆さ弓で弾いた時の音量・音色のよさを生徒自身が認識し, 普通の持ち方でも同じ音量・音色で弾けるようになることをねらいとしている。鈴木氏によれば, 「逆さ弓奏法」は「初歩もバランスの弓で鳴らす美しい大きな音の育つ, 新しいすてきな教育法」である。  
(才能教育研究会『才能教育』No.75, 1986年冬季号, 55ページ。)
- (12) 『鈴木鎮一全集5』前掲書, 158-159ページ。
- (13) 『鈴木鎮一全集1』双柿舎, 221ページ。  
「重点的にこの一つだけはどうしても是正しなければというものを定め, 一つずつ矯正してゆくやり方」
- (14) 『鈴木鎮一全集1』前掲書, 127ページ。

#### おわりに

本稿では、「能力開発」の有力な方法である「才能教育」について考察した。これまでの考察で, 才能教育法=「鈴木メソッド」は教育学的・教授学的に見てもきわめて妥当な, 優れた方法であることがわかった。今後, 音楽以外の多くの教育分野で実験され, その有効性が確かめられていく必要がある。バイオリンやピアノやチェロは, 「能力素質」を最大限に発揮させる一つの手段にすぎない。鈴木氏は次のように

述べている。

「能力の育成ということは要するに高度に働く頭脳をつくるということが目標である。そのためには幼い子供たちに算数なり, 国語なり, 習字なり, 絵なり, 音楽なり, 舞踊なり, 技術的なものなり, その他多種多様にあるであろうが, どれを選択してもよろしいが, とにかくまず一種目のみを重点的に指導して, その能力の芽を立派に育てるようにおすすめしたい」<sup>(1)</sup>

鈴木氏は非凡な能力を育てるためには, 二兎を追ってはならないと述べているのである。なぜなら, 「力が常に四方に分散していて, 優良な結果を生むことはできない」<sup>(2)</sup>からである。また, 一事一能に秀でた人間は他の面でも優秀な場合が多いものである。鈴木氏はその代表例であるアインシュタインの人間性に深く感動している。<sup>(3)</sup>

能力は転移するのである。例えば, バイオリン演奏の優れた能力を身につけた人は, 優れた根気と集中力の持主でもある。根気と集中力が育たなければ演奏能力も育たないはずだからである。また, 記憶力も育っていなければ, 数多くの曲を楽譜も見ないで演奏することはできないはずである。

「才能教育研究会」の卒業生に対するアンケート調査<sup>(5)</sup>によれば, バイオリンの演奏能力の発揮が学業成績にもよい影響を与えていることがよくわかる。<sup>(4)</sup>音楽以外の分野での「鈴木メソッド」の成果も大変興味深いのであるが, 本稿では考察できなかった。今後の課題としたい。

#### 註

- (1) 『鈴木鎮一全集1』双柿舎, 136ページ。
- (2) 同上書, 139ページ。
- (3) 鈴木鎮一『愛に生きる』講談社現代新書, 150-158ページ。
- (4) 才能教育研究会『才能教育』No.77, 1986年夏季号, 85ページ。

尚, 本稿の分担は次の通りである。

白幡久美子（東海女子短期大学，児童教育学科）

II. 能力を育てる五つの条件

IV. バイオリン指導法の特徴

おわりに

白幡富夫（東海女子大学，人間関係学科）

はじめに

I. 素質と能力の関係

III. 母国語教育法から「鈴木メソッド」へ